

過疎地域における祭礼の存続形態

— 佐久市望月地域の榊祭りを事例として —

卯田卓矢・阿部依子

本研究は佐久市望月地域の榊祭りを事例に、過疎地域における祭礼の存続形態について検討した。榊祭りはこれまで地区の住民により担われてきた。しかし、1970年代以降の過疎化によって担い手不足が深刻化した。旧望月町はこれを受け、イベントを加えた「町民祭」とすることで祭りの存続を図った。この町民祭の開始は寄付金集めの分担制の導入、祭りの参加スケールの拡大による担い手の確保と育成機会の増加という点で榊祭りの存続に重要な役割を果たした。

また、榊祭りは当初からイベントと祭事が明確に区分され、担い手はこれまでと同様の活動を行うことができた。この点は単に祭事の継続だけでなく、担い手の一連の活動によってもたらされる祭りへの愛着や担い手としての自覚の醸成を維持する上でも重要な意味を有した。こうした自覚の醸成は、祭礼の存続における費用面の負担軽減や人員確保などの直接的な課題に対し、間接的な課題と位置づけられる。以上のことから、榊祭りは町民祭を機に直接のおよび間接的な課題を克服することで存続してきたと捉えられた。

キーワード：祭礼、自治体、担い手、存続、佐久市望月地域

I はじめに

I-1 研究課題

1950年代以降の農山村地域は高度経済成長に伴う労働力の都市部への大量移動により過疎化が進行した。政府はこれを受けて、1966年の経済審査会・地域部会において過疎現象を初めて取り上げた。部会では「過疎」を地域の人口減少によって防災、教育、保健などの地域社会の基礎的条件の維持が困難となり、また資源の合理的利用が低下することで、地域の生産機能が著しく減少する状況とした（池上、1975；米山、1969）。

過疎地域ではこうした経済的・社会的基盤の衰退に加えて、祭礼や伝統行事などの文化的基盤の衰退もみられた。地域の祭礼は五穀豊穰・無病息災の祈願を目的に地域内の氏子や信者により執り行われるものである（鈴木、1940；原田、1975）。そのため、祭礼の担い手である住民が減少した地

域では祭礼の簡略化や停止という状況に陥った。小松（1997）は長野県下伊那郡上村（現 飯田市上村地区）に伝わる霜月祭りを調査した際、かつては老若男女や子どもたちで祭殿を埋め尽くした祭りが、30年後の現在では氏子も観光客もまばらとなり、なかには祭りを廃止した集落もあったことを報告している。また、星野（2012：40-42）は過疎地域における伝統芸能を調査する中で、小学生がゼロとなり担い手が存在しないこと、衣装や楽器の補修整備費用が捻出できないことなどから、住民の「打つ手なし」の実態について指摘した。これらの報告にあるように、農山村では担い手となる若年者の減少や高齢化の進行、また費用面の負担などにより、祭礼の維持・継承が困難となる地域が数多く存在した（米山、1969）。

以上の状況に対し、過疎地域の自治体では1980年代半ばごろから、祭礼や伝統行事を地域活性化の資源として捉え直す動きがみられるようになって

た。その中で、1984年度から始まった地域小規模活性化推進事業（むらおこし事業）では、地域の特性を活かした特産品づくりとともに、祭礼や伝統行事に注目した事業が進められた（西野、1998）。そこでは、本来祭礼に無関係な踊りやパレード、カラオケ大会などの各種のイベントを付加することで、地域の活性化や紐帯の強化に加えて、祭礼に要する費用面の確保による存続が期待された。また、1992年に伝統行事、特に民俗芸能の活用による観光振興を目的に制定された「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」（通称「おまつり法」）ではこの方針がさらに強化された。それ以降、各地域は自治体の支援のもとでイベントと結びついた祭礼や伝統行事を催すようになった（農山漁村文化協会、1998；谷部、2000など）。

ただ、こうした祭礼は集客への期待から祭礼内容の大幅な変更、すなわち「する祭り」から「見せる祭り」への変容や、「商品化」が進行することも少なくない。また、祭礼に付随するイベントのマンネリ化から祭礼自体が中止・廃止となった事例も存在する（芦田、2001）。そのため、自治体主導の祭礼は伝統行事が有する真正性（オーセンティシティ）の喪失への懸念などの点から、批判的な声も挙がっている（小島、1992；茂木、1993）。

しかしながら、自治体の支援を機に行事の活性化が促進した事例もみられる。石川（2004、2005）は宇和島地方および隠岐における闘牛の存続要因を検討する中で、自治体による運営組織の制度的整備や観光化が担い手の活動とそれを支える様々な仕組みの形成に重要な役割を果たしたことを明らかにした。また、安藤（2002）は盛岡市の祭り「盛岡さんさ踊り」と「チャグチャグ馬コ」を対象に、祭りの担い手が「文化財保護」および「観光化」の2つの異なる目的を進める自治体との対立や葛藤を通して祭りを存続、かつ活性化させたことを指摘した。ここからは、祭りや伝統行事が存続あるいは活性化する上で自治体の取り組みが重要な意味を有していることが看取される。

ただ、これらの研究は自治体の経済的支援や観光振興の役割については論じているものの、担い手の確保と自治体との関係については十分に検討していない。先述の小松や星野の報告にあったように、人口の減少、特に若年者の減少が著しい過疎地域では担い手の確保は最重要の課題である。そのため、祭礼の存続における自治体の役割を検討するには、自治体が担い手の確保や創出に対していかなる取り組みを進めたかについても注視する必要がある。

地理学における過疎地域の研究は、これまで産業構造の変化や労働力移動などを対象とすることが多かった（篠原、1991；岡橋、1997、2000など）。一方で、社会的・文化的基盤に着目した研究としては、住民組織の維持やコミュニティ活動などをテーマとした研究の蓄積はみられるものの（田林、2000；金、2000；中條、2003；夫・金、2010など）、祭礼や行事の存続に焦点を当てた研究はあまり行われていない。今後、限界集落化の一層の進行が予想される農山村において（大野、2005；小田切、2009など）、地域の重要な文化的基盤といえる祭礼の存続要因を検討することは意義があると考えられる。

本研究は以上を踏まえ、自治体の取り組みと祭礼の担い手の関係に注目し検討することを通して、過疎地域における祭礼の存続形態について考察することを目的とする。研究対象は佐久市望月地域（旧望月町）の榊祭りである。

榊祭りは望月地域の望月区に所在する大伴神社の例祭として、毎年8月15日の夜に執り行われる祭りである。榊祭りはこれまで望月区の住民により担われてきた。しかし、1970年代以降の急速な過疎化によって担い手の不足が深刻化した。そのため、1987年に町民全体の祭りへと変更され、旧望月町や望月町商工会の協力のもとで実施されるようになった。これにより当日は午後から子供神輿や野外コンサートなどの町民参加のイベントが追加され、榊祭りは「夜の部」として執り行われることになった。ただし、榊祭りの祭事自体に大きな変更はなく、現在まで続けられている。本研

究では「古式・イベント融合型」(田中, 2004)といえるこの榊祭りを対象に、祭礼の存続をめぐる自治体の取り組みと祭りの担い手の関係について検討する。

研究手順は以下の通りである。Ⅰ－Ⅱは対象地域の佐久市望月地域と榊祭りについて概観する。Ⅱは戦後の望月地域と榊祭りの動向を述べる。Ⅲでは、望月町民祭「榊祭り」(2005年4月の佐久市合併後は佐久市民祭「榊祭り」と改称)の誕生の経緯と行事内容の変遷、自治体や商工会の協力関係について言及する。Ⅳでは、榊祭りの運営組織と神輿の担ぎ手の活動を検討する。Ⅴでは以上の各主体の活動を踏まえた上で、榊祭りの存続について考察し、Ⅵで結論とする。

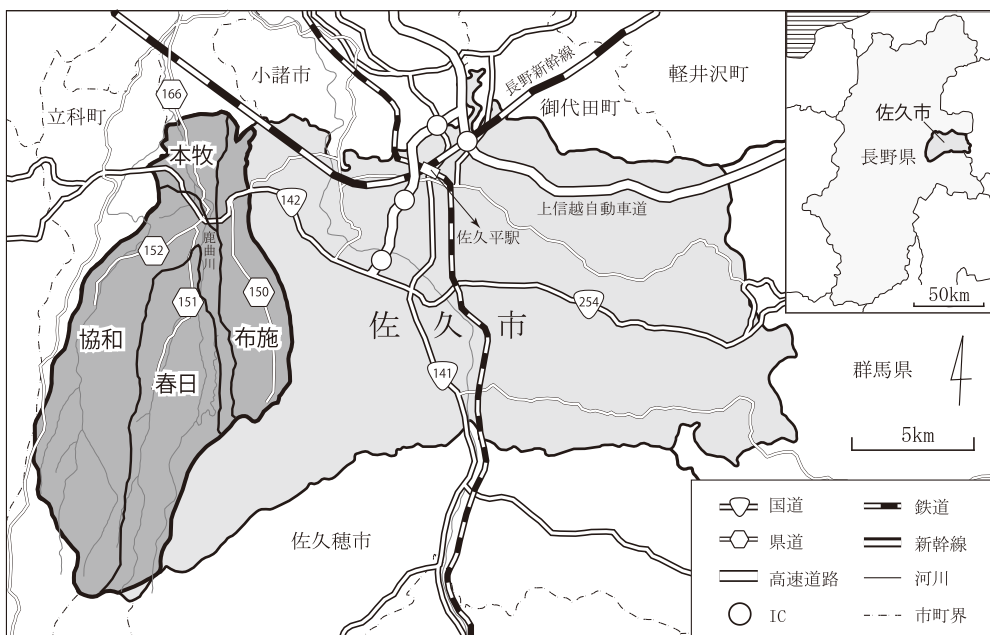
調査方法は佐久市役所望月支所、佐久市望月商工会、佐久市民祭「榊祭り」実行委員会、祭りの運営組織である道祖団、神輿の担ぎ手などへの聞き取り調査によった。調査は2013年10月21日～25日、2014年5月26日～30日、8月15日～16日にかけて実施したものである。

Ⅰ－Ⅱ 研究対象地域

1) 佐久市望月地域

本項は佐久市望月地域、および榊祭りが執り行われる望月区(本牧地区内)を概観する。望月地域は佐久市の西部に位置し、東部は旧浅科村(現在の佐久市浅科)、西部は北佐久郡立科町と隣接し、南部に八ヶ岳火山群の一つである蓼科山を有する山麓丘陵地帯である(第1図)。地域の中央には蓼科山を水源とする^{かくま}鹿曲川が流れ、下流の千曲川に注いでいる。主要幹線は東西を通る国道142号線のほか、北部に県道166号線、南北に県道3線が走る。

望月地域は2005年4月に佐久市と合併するまで望月町として北佐久郡に属していた。望月町は1959年8月に本牧町の一部(旧茂田井村)を除く地域と布施村、春日村、協和村の4町村が合併した範囲であった。このうち本牧町は江戸時代に中山道の望月宿が所在した地域を含んでおり、望月地域の中心的地域であった。本牧町における行政区域の推移についてみると、廃藩置県後の1875年に当時の望月町と望月新町が合併し望月町(当



注) 濃色部分は望月地域(旧望月町)を示す。

時)となり、1890年に望月町、茂田井村、印内村の3つの村が合併して本牧村となった。その後、1954年4月の町制施行により本牧村は本牧町に変更され、1959年8月に旧望月町の一部となった(長野県総務部地方課編、1965)。

本牧町(現在の本牧地区)のうち旧中山道沿いを範囲とする望月区は、古くから交通の要衝として重視され、上記のように江戸時代には中山道の宿場が設けられた。宿場はもともと鹿曲川右岸の望月新町に位置し、そこから瓜生坂へ至るルートをとっていた。しかし、1742年に発生した「戌の大満水」と呼ばれる大洪水により望月新町の50戸が流失し、左岸に移動した。1804年の宿割図によると、当時の望月宿の家数は旅籠屋29軒、下宿89軒、貸家12軒、本陣・脇本陣各1軒の計132軒であった(佐久市立望月歴史民俗資料館編、2008)。

明治期の望月宿周辺は鉄道が敷設されなかったことで宿場町としての機能は急速に低下した。これにより望月地域は農業や林業を中心とした産業構成へ変化した。大正期ごろになると、当初副業として始められた養蚕業が隆盛し、養蚕組合の設立や養蚕教師の雇用、技術研究などが行われた。養蚕業は1960年代後半ごろまで続けられ、地域の農家経済を支えた。本牧地区においても旧宿周辺で養蚕が行われ、長野県下で絹糸産業が盛んであった岡谷、諏訪、丸子方面から多くの仲買人が訪れた。こうした農家の活気に付随し、当時の本牧地区では呉服屋や料理店、小間物屋、金物店などが建ち並び、賑わいをみせた。しかし、1960年代以降の輸入生糸の増加に伴い、本牧地区の養蚕業は衰退した(望月町誌編集委員会編、1999)。

望月地域は1960年代ごろから若年労働者の流出が顕著となり、過疎化が進行した。詳細は後述するが、1960年からの15年間の人口減少率は19.8%を示した。これは当時所属した北佐久郡において最も高い減少率であった。その後も人口減少は続き、望月地域は1970年以降に制定された4つの過疎法すべての指定を受けた。2014年4月1日現在の人口は9,483人である(住民基本台帳による)。

2) 榊祭り

榊祭りは望月区の大伴神社の例祭として、毎年8月15日の夜に執り行われる祭りである。大伴神社は佐久式内三社のうちの一社とされ、祭神は武日連・月読尊・武居大伴主神である(望月町誌編集委員会編、1996)。祭りは望月区の東方に位置する松明山で点火した松明を望月橋の上から投げ下ろす火祭り(写真1)、投下後に獅子舞と神輿が地区内を練り歩く2つの祭事に大別される(写真2)。榊祭りは松明の火と神輿の榊によって



写真1 榊祭りにおける松明投下の様子

(2014年8月 阿部撮影)



写真2 榊祭りにおける榊神輿巡行の様子

(2014年8月 阿部撮影)

町内の不浄を払い清め、五穀豊穡や無病息災を祈る祭りとされている。また、松明を川へ投げ入れたり、神輿同士を荒々しくぶつけ合ったりする様子から「信州の奇祭」とも称される（北沢、1988）。

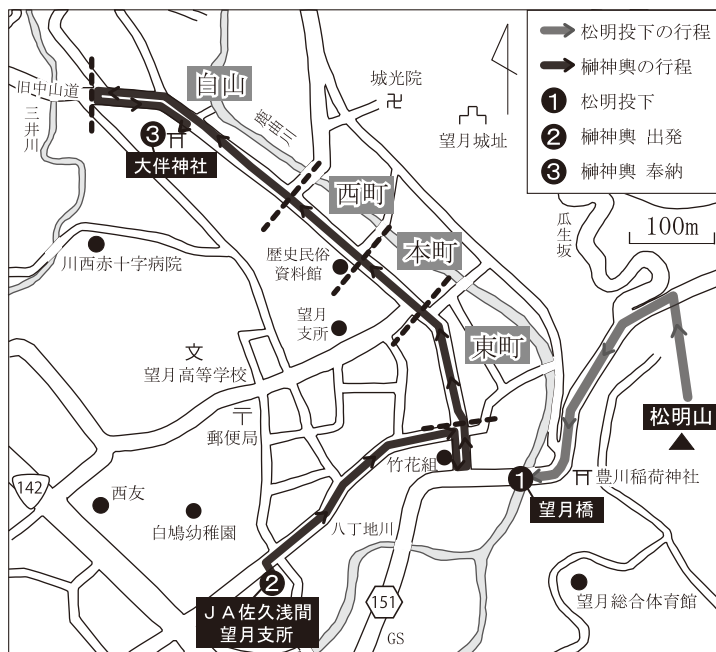
榊祭りの起源には不明な点が多い。一説には、戦国時代の延徳年間（1489～91年）に甲州の武田勢に対し、収穫の済んだ藁に火を付け侵入を阻止したことが起源とされるが定かではない（大沢、1975）。また、明治末ごろまでは神輿の形態はなく、若者（若衆）が御神木の榊の生枝を背や頭に括り付け、町内を練り歩いていた。松明投下後に神輿を渡御するという現在の形態に定まったのは戦前期ごろともされる¹⁾。

次に当日の祭りの構成について述べる。午後6時ごろの打ち上げ花火を合図に、松明山にかがり火が焚かれ、かがり火から点火した松明を振りかざしながら瓜生坂を下り、望月橋から松明を投げ下ろす（第2図）。この松明投下を終えると、JA佐久浅間望月支所から旧中山道沿いを獅子舞と神

輿が巡行する。その後、午後11時ごろに神輿が大伴神社へ奉納され、祭りは終了する。

神輿は大伴神社の氏子地域である東町、^{ほん}本町、西町、白山の4地区から1基ずつ出され（第2図）、計4基で渡御する。この神輿は榊神輿と呼ばれ、神輿の原型とされる「鳳輦」^{ほうれん}ではなく、太い角材を井桁に組んだ上に青葉のままのコナラの木（御神木）を結びつけたものである（写真3）²⁾。井桁の上にはリーダーと呼ばれる代表者2～4名ほどが乗り、「ヨイヨイ、ヨイヨイ」の掛け声のもと30名ほどの若者が担ぐ。神輿の担ぎ手は高校卒業ごろから28歳までの男子とされている。ただし、近年は担ぎ手不足のため年齢を引き上げ、3年間OBとして担ぐことができる地区（本町）が存在する。また、担ぎ手は望月区出身の住民が中心であるが、過疎化に伴い地区外や望月地域以外からの参加がみられるようになった。

担ぎ手は地区ごとのリーダーとリーダー補と呼ばれる者の指示により神輿を担ぐ。神輿の前列および後列は主としてベテランの担ぎ手、中央部分



第2図 榊祭りにおける松明投下と獅子舞および榊神輿の行程
(2014年)

(佐久市役所望月支所蔵資料、聞き取り調査より作成)



写真3 榊祭りに使用される榊神輿

注) 写真は子供神輿に使用される榊神輿であるが、夜の部で使用される神輿も同様の型である。

(2014年8月 阿部撮影)

には若手の担ぎ手が配置される。各地区では神輿の木に巻きつける新モス（新モスリン）や担ぎ手のたすきの色が決められており、東町は青、本町は緑、西町は白、白山は赤である。祭り当日の担ぎ手は、白のサラシ、黒の腹掛けと半ダコ（股引）、地下足袋、豆絞り鉢巻という出で立ちである。また、体にはいくつもの鈴を付けるため、動くたびに鈴の音色が響きわたる。

神輿の渡御の順は、出発時には白山、東町、本町、西町である。その後、各々の地区になるとその地区の神輿が先頭に入れ替わる。また、交差点や寄付を受けた店舗（民家）などでも入れ替わり、計10回ほど変化する。その際、神輿同士をぶつけ合う「あおり」や、神輿を地面に勢いよく叩きつける「土（胴）突き」、「まわし」などを繰り返す。

神輿に随行する獅子舞は地区ごとに存在する。獅子舞の構成は軍配団扇をもつ幣負^{へいおい}1名、獅子の頭をもつ者、尾をもつ者各1名の計3人1組である。舞の型は10以上あり、笛の音色に合わせて神輿に向けて舞う。この時、獅子舞は必ず神輿に先導する。獅子舞の形態は室町時代に流行した田楽の流れと結びつくともいわれる。近年、長野県飯

田市で開催された獅子舞フェスティバルに出演し、舞が披露された。

祭りの準備は望月区自治会と道祖^{どうそだん}団と呼ばれる組織により行われる。特に後者の道祖団は、神輿の準備（木材の伐採・搬出）や物品手配、当日の神輿の誘導などの運営面の中心的役割を担う。道祖団の構成は総団長1名、副団長2名、総務会計1名、各地区の団長4名、獅子団長1名の計9名である。各地区には神輿の役員として団長、リーダー、リーダー補が存在するが、道祖団とされるのは団長のみである。道祖団は毎年6月ごろから祭りに使用する松明や竹の準備を行ったり、担ぎ手の衣装を発注したりする。榊祭り当日は神輿を担がず、神輿の誘導や食事（茶、水、酒）の配給などを行う。

他方、榊祭りは過疎化による担い手の減少や道祖団の活動の負担増などを背景に、1987年から旧望月町や望月町商工会の協力のもとで望月町民祭「榊祭り」（佐久市合併以降は佐久市民祭「榊祭り」に改称）として実施されるようになった。これにより当日は午後から子供神輿や野外コンサートなどの町民参加のイベントが加わり、榊祭りは「夜の部」として執り行われることになった。ただし、榊祭りの祭事自体に大きな変更はない。

2013年の日程をみると、午前10時の祈願祭のあと³⁾、午後から「昼の部」として望月高等学校と望月中学校の神輿各1基、望月地域内の本牧地区、協和地区、布施地区、春日地区の各保育園、白鳩幼稚園の園児参加による舟引き（舟神輿）、望月小学校の樽神輿1基、地区別の榊神輿4基の順に望月支所から大伴神社への巡行が行われた。その後、午後5時半からバスターミナルにて望月太鼓が演奏され、午後6時半ごろから松明投下、午後7時半ごろから民謡流し、獅子舞、榊神輿が巡行した。

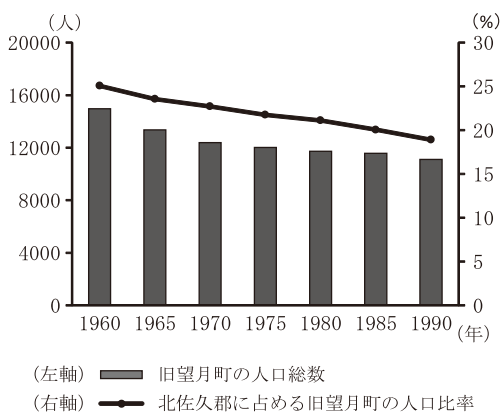
望月支所によると、「昼の部」のイベントを含めた当日の観光客数は2012年に約3万3,000人、2013年は約3万1,000人であった。観光客は望月地域や佐久市だけでなく、上田市や長野市などの市外からも多数訪れる。

Ⅱ 戦後の望月地域と榊祭り

本章は戦後の望月地域と榊祭りの動向について検討する。Ⅱ－１では1960年代以降に急速に進行した望月地域の過疎化の状況を述べる。Ⅱ－２では過疎化に伴う榊祭りの変化について言及する。

Ⅱ－１ 過疎化の進行と望月地域

長野県において人口の減少が確認されたのは1955年ごろである。同年から1966年の12年間の減少人口は6万9,217人、減少率は3.4%であった。旧望月町⁴⁾が所属した北佐久郡についてみると、過疎が問題化した1960～70年代は軽井沢町、御代田町では人口の減少がほとんどみられなかったが、立科町、浅科町、北御牧村、望月町はすべて減少した。1960年と1975年の間の各町村の減少率は、立科町13.6%、浅科町12.7%、北御牧村17.7%、望月町19.8%であり、旧望月町が最も高かった。さらに、1976年以降の15年間の増減率をみると、立科町3.0%の増加、浅科町2.2%の増加、北御牧村0.7%の減少であるのに対し、望月町7.5%の減少となっており、旧望月町は北佐久郡で最も過疎化が進行した（第3図）（望月町誌編集委員会編、1999）。



第3図 旧望月町の人口推移と北佐久郡に占める割合（1960～1990年）

注）望月町の茂田井の一部は1960年に立科町に編入したため含まない。

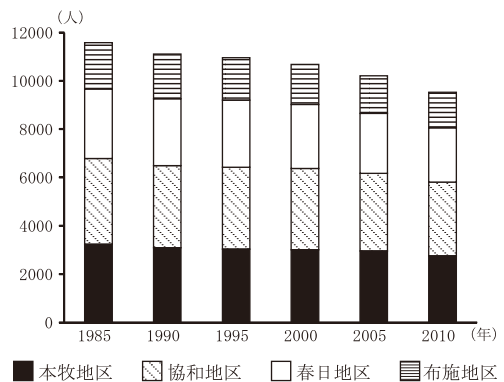
（望月町誌編集委員会編（1999）より作成）

また、旧望月町の年齢別人口の推移をみると、0～14歳人口は1960年の31.5%から1990年には16.9%と大幅な減少を示した。一方で、同期間の65歳以上人口は7.4%から22.6%と3倍以上の増加をみせた。加えて、1990年の15～64歳人口は1960～70年代と比べ5%程度減少しており、旧望月町は若年労働者の流出と高齢化が進行した。

次に、1985～2010年における旧望月町の本牧地区、布施地区、春日地区、協和地区の4地区別人口の推移をみると（第4図）、当期間では4地区とも人口の減少がみられ、また各地区の人口割合はあまり変化していない。そのことから、旧望月町の中心地域であった本牧地区においても、ほかの3地区と同程度の減少傾向であった。

政府は以上のような過疎化の進行に対して、1970年4月に10年間の時限立法である過疎地域対策緊急措置法（過疎法）を制定した。この法律の適用地域は、過去5年の人口減少率10%以上、財政力指数0.4未満の市町村とされ、全国に1,093、長野県では39の地域が対象となった。このうち、東信地方では7町村、佐久地方では旧望月町のみが適用された。町ではこれを受けて過疎債を発行し、保育所、消防施設、道路橋梁、集落センターなどを整備した（望月町誌編集委員会編、1999）。

過疎法は1980年3月に過疎地域振興特別措置法として延長され、旧望月町は政令の弾力的運用条



第4図 旧望月町（望月地域）における地区別の人口推移（1985～2010年）

（国勢調査より作成）

項に適用し、再度過疎地域の指定を受けた。また、10年後の1990年3月には過疎地域活性化特別措置法（新過疎法）が新たに制定され、県内では49町村が指定を受けた。北佐久郡では旧法と同様に旧望月町のみが適用となった。本法の指定要件は、1960年から25年間の人口減少率が25%以上、同期間の人口減少率が20%以上かつ1985年の高齢者（65歳以上）比率が16%以上、同期間の人口減少率が20%以上かつ1985年の若年者（15歳以上30歳未満）比率が16%以下、および財政力指数の4要件である。旧望月町は後三者を満たしていることから3度目の過疎地域の指定となった。町は指定を受け、過疎債事業として道路整備のほか、コミュニティセンター、デイ・サービスセンター、公衆便所、夜間照明施設などを新設した。また、1990年に『過疎地域活性化計画』を掲げ、地域活性化による人口増を計画した（望月町誌編纂委員会編、1999）。しかしながら、この計画は達成されず、人口の減少は継続した。その後、2000年3月に4度目となる過疎地域自立促進特別措置法の指定を受け、各種事業が実施されたものの、現在に至るまで人口の減少に歯止めはかかっていない。

Ⅱ－2 戦後の榊祭り

次に戦後の榊祭りについて検討する（第1表）。先述のように、榊祭りの起源や現在までの経緯には不明な点が多い。明治末ごろまでは神輿はなく、若者が榊を背や頭に結び、町内を歩いていたともされ、現在の勇壮な祭りとは趣を異にしたといわれる。その後、戦前期ごろに現在の形態となった。当時は町外からの見物客も詰め掛け、また人出を見込んだ多数の露天商が街道沿いに軒を並べた。

戦後になると、商工会が榊祭りの集客を活用した事業を実施した。1947年5月に発足した望月商工会は戦時体制の影響から衰退しつつあった商工業、特に商店街の復興策の一つとして榊祭りに注目し、榊祭りを活用した各種の取り組みを行った。具体的には、祭り当日の午前10時から町内3か所での奉納演芸競演会の開催、「日本ニュースカメラ班」への祭りの実況と映像制作の依頼、

8月12日～15日の全商店の大売出し、などである（望月町誌編纂委員会編、1999）。

また、この当時の本牧地区の時事や教育・文化などの情報を発信した『本牧時報』には、榊祭り（「祭り」も含む）に関する記事が毎年掲載された。特に1949年は3件、1950年は6件の記事があり、榊祭りが当地区において多大な関心を有していた（望月町誌編纂委員会編、1999）。『本牧時報』は1959年の旧望月町誕生により『望月公民館報』（翌

第1表 戦後の望月地域と榊祭り

年月	事項
1947. 5	望月商工会が復興策の一つとして榊祭りを活用した取り組みを行う
1954. 4	町制施行により本牧村が本牧町となる
1959. 8	本牧町の一部、布施村、春日村、協和村の4町村が合併し、望月町が誕生
1966	政府の経済審査会・地域部会で農山村の過疎現象を初めて指摘
1966. 9	「盛大だった榊祭」『館報もちづき』にて初めて若年者の減少を指摘
1970. 4	旧望月町が過疎地域対策緊急措置法の指定を受ける
1980. 3	旧望月町が過疎地域振興特別措置法の指定を受ける
1983. 8	本牧小学校4～6年生が子供神輿に参加
1986	旧望月町が地域小規模事業活性化推進事業（「むらおこし事業」）の指定を受ける むらおこし事業実行委員会の創設
1986. 8	本牧小学校の全学年が子供神輿に参加
1987. 8	望月町民祭「榊祭り」の開始 布施、春日、協和の各地区の小学校が子供神輿に参加
1990. 3	旧望月町が過疎地域活性化特別措置法の指定を受ける 旧望月町が『過疎地域活性化計画』を策定
1995. 8	望月中学校が子供神輿に参加
2000. 3	旧望月町が過疎地域自立促進特別措置法の指定を受ける
2004 ごろ	本町が神輿の担ぎ手にOBの参加を認める
2005. 4	旧望月町が佐久市に合併
2006. 8	望月高等学校が子供神輿に参加
2008. 4	4地区の小学校が佐久市立望月小学校に統合

注）表中のゴシック体は榊祭りに関する事項を示す。

（望月町誌編纂委員会編（1999）、および聞き取り調査より作成）

年に『館報もちづき』に改称)に引き継がれるが、『館報もちづき』においても刊行当初から榊祭りに関する記事がみられた。記事は、写真4のように巻頭に写真入りでその年の祭りの賑わいが記されたもの、また「郷土風物誌」(『館報もちづき』34号, 1962年)や「郷土の文化財めぐり」(『館報もちづき』67~68号, 1966年)として榊祭りを紹介したものなどがあった。

その中で、1966年9月の「盛大だった^ママ祭」と題した写真付きの記事には、「若い人の減少から、来年その次とミコンが続くかどうか心配されているようですが、郷土のこのすばらしいお祭は、なんとかして長く続けたいものです」と、若年者の減少による祭りの存続の危惧が記された(『館報もちづき』68号, 1966年)。先述のように、農山村の過疎化は1960年代ごろから進行し、旧望月町では北佐久郡の中で最も高い人口減少率を記録していた。

その後、1960年代後半以降になると、「年ごとに減る若い人手に、関係者は頭がいたい」(『館報もちづき』97号, 1969年)、「若い人たちが少なくなった、祭の運営も苦しい」などと述べられ(『館報もちづき』128号, 1972年)、祭りの運営を担う道祖団や神輿の担ぎ手の人員に影響を及ぼしていることが報告された。また、記事ではこうした現況に対して、「古くからうけつがれた^ママ祭は、たいまつと火とともに望月の名物として長く残して

おきたい」や(『館報もちづき』97号, 1969年)、「ふるさととの良さがあらためて言われるこの頃、^ママ祭は望月町民全体でいつまでも大切にしたい」とされ(『館報もちづき』128号, 1972年)、望月地域の伝統的な祭礼として存続が訴えられた。

他方、道祖団の役員減少には以上のような若年者の減少に加えて、就業構造の変化も大きく関係した。1970年代ごろまでの道祖団は祭りの2~3か月ほど前から地区の世話人と呼ばれる者の自宅で共同生活し、松明や竹の準備、寄付金集めなどを行っていた。そのため、役員の中には仕事を長期にわたり休業しなければならない者も存在した。ただ、当時の役員の多くは農家や自営業であり、時間的な都合がついたことから、道祖団の活動を中心に行うことができた。しかし、就業構造が変化するに伴い数か月にわたる休業が困難となり、次第に道祖団への加入を希望する者は減少した。

また、現在、佐久市望月商工会との分担で行われている寄付金集めは、当時は道祖団が担っていた。この寄付金は神輿の修繕費や衣装の購入、道祖団の飲食費など、祭りを維持・運営する上での経済的基盤となるものである。道祖団は毎年5月ごろから本牧地区や旧望月町に加えて、佐久市の各地域を回り、企業や団体、個人を対象に寄付を募っていた。しかし、大口である企業からの寄付は経済変動に左右されやすく、年によって寄付額も大きく変化した。また、宗教的理由や祭りそのものへの関心の低下から寄付を拒否する住民も増加するようになり、例年の額に達しないことも少なくなかった。道祖団の経験者への聞き取り調査によると、寄付金が不足し、祭り前日まで各地を回ることもあったという。さらに、道祖団の加入者は年々減少傾向にあり、道祖団のみで行う寄付金集めは次第に大きな負担となった。この寄付金の問題は榊祭りが町民祭へ変更される要因として、過疎化による若年者の減少とともに重要な位置を占めた。



写真4 『館報もちづき』(34号)における榊祭りの記事(1962年9月)

Ⅲ 自治体および商工会と連携した新しい祭りの誕生と展開

本章は望月町民祭「榊祭り」（佐久市合併後は佐久市民祭「榊祭り」）の誕生の経緯と行事内容の変遷、自治体および商工会の協力関係について検討する⁵⁾。

Ⅲ－１ 榊祭りの存続問題と「むらおこし事業」

前章で詳述したように、榊祭りは神輿の担ぎ手不足や、道祖団の活動の負担増によって存続が危惧されていた。1984年当時の道祖団役員への聞き取り調査によると、役員は1970年代後半ごろから減少し、1985年には3名と極端に減少した。また、同年の役員すべてが被雇用者であったため、道祖団の活動、特に広範囲にわたって行わなければならない寄付金集めが大きな負担となった。この状況に対して、当時の役員は祭りの存続自体が困難であることを自治会や町に報告し、対策を講じるように申し入れたという。

一方、旧望月町は同時期に地域小規模事業活性化推進事業（「むらおこし事業」）の一環として榊祭りに注目していた。1984年度から始まったむらおこし事業とは、過疎地域を対象として地域内の産業おこしを支援するものであり、事業は各市町村の商工会が主導した（中小企業庁編、1989）。指定を受けた地域は、地域活性化のための地域特性を活かした特産品づくりや地域開発などを考案した。全国商工会連合会によると、1984～85年の2年間に開発された品目および件数は、特産品開発約1,000品目、観光開発約300件であった。このうち、観光開発の内訳をみると、観光マップやパンフレットなどの作成が27.2%と最も高く、以下、観光開発計画24.8%、観光案内版の設置18.2%であった（中小企業庁編、1989）。この事業はその後に全国各地で実施された「むらおこし」ブームの契機となった（西野、1998）。

旧望月町は1986年度に指定を受け、望月町商工会の主導のもとでむらおこし事業実行委員会を立ち上げた。むらおこし事業実行委員会は「特産

品開発事業」、「観光資源開発事業」、「イベント研究開発事業」の3部会を創設し、事業を進めた。具体的な事業としては、住民を対象としたアンケートの実施と「むらおこし」のための「アイディア」の募集⁶⁾、開発計画マップの作成（「望月町の観光と夢の開発プラン」）、観光案内版の整備、「むらおこし道祖神」の建立などである（むらおこし事業実行委員会、1987）。

また、同年9月には町民への事業の周知を目的に、望月町むらおこし事業特別学識委員である望月町長佐藤幸男と東京学芸大学教授市川健夫（役職はいずれも当時）の講演が催された。この中で市川は観光による地域活性化の方策について述べた。市川は、観光の発展は「薬用人参などの地場産業や農林業の活性化にも役立ちます」とし、「それでは、この地域の観光の活性化を図るにはどうしたらいいかと言うと、伝統文化を踏まえることが基本になります」とした。市川は旧望月町の伝統文化として、望月の駒、望月宿、春日溪谷、大河原峠、榊祭りなどを挙げ、「先祖から受け継いだこれらの遺産を有効に使うこと」が地域活性化にとって重要であると述べた（むらおこし事業実行委員会、1987：16-17）。

以上の指摘は、佐藤町長が「これから私達も市川先生等の御指導を十二分に受けながら精一杯の努力をしてまいります」と言及しているように（むらおこし事業実行委員会、1987：7）、その後の「むらおこし事業」の基本的指針となった。このうち、望月の駒は1989年に第一回駒の里草競馬大会として実現した。また、宿場町については、当時宿場町の活性化を進めていた岐阜県美濃加茂市への視察が実施された。

さらに、市川によって旧望月町の伝統文化の一つとして取り上げられた榊祭りは、先の住民を対象としたアンケートでも町を代表する祭りとされたこともあり⁷⁾、地域活性化を促進する上で重要な催しとされた。また、「むらおこし」のためのアイデアの募集では榊祭りの今後のあり方を尋ねる項目もあった。この質問は、「榊祭りをもっと盛大にするにはどのようにしたらよいかご意見を

お聞かせ下さい」と「榊祭りを中心に前後に何か催しをするとしたらどんなのが良いと思いますかお聞かせ下さい」の2点である（むらおこし事業実行委員会、1987）。

第2表は各質問の回答をまとめ、集計したものである。前者の質問に対しては、「町全体の祭りにする」が最も多く184人を数えた。次いで「祭りの期間を長く」する（40人）、「各種催しを行う」（28人）、「宣伝をもっと広く行う」（22人）、「松明を高いところから投げる、小・中高生全員参加、コースの検討」（22人）、「町や商工会に協力してほしい」（16人）などとなった。以上の結果から、榊祭りに対しては各種イベントと融合した町民全体の祭りとする意見が多く存在した。一方、これらの意見の中には、「若者総参加」や「町や商工会に協力してほしい」、「生活がかかっている」、「長く休めない」などもみられるように、人員不足から存続が困難となっていた当時の榊祭りの状況も関係していた。

また、後者の質問については、「花火大会を盛大に」が78人と最多であり、以下、「盆おどりを盛大にコンクール」（36人）、「歌謡ショー、カラ

オケ大会、民謡大会」（30人）、「時代行列、民謡流し」（26人）などの結果となった。こうしたイベントに関わる意見は、後述する町民祭に活かされ、芸能人や有名人の誘致、歌謡ショー、カラオケ大会、民謡流しなどは実際に取り入れられた。

Ⅲ-2 望月町民祭「榊祭り」の誕生

1) 望月町民祭「榊祭り」の開始と「昼の部」の推移

「観光資源開発事業」の部会は地域活性化の方策や先の道祖団による申し入れ、また住民のアイデアの結果を踏まえ、榊祭りを新たに町民全体の祭りとして実施することを提起した。その後、1987年6月に関係者を交えた協議が行われ、「榊祭」実行委員会のもとで開催されることが正式に決定した。

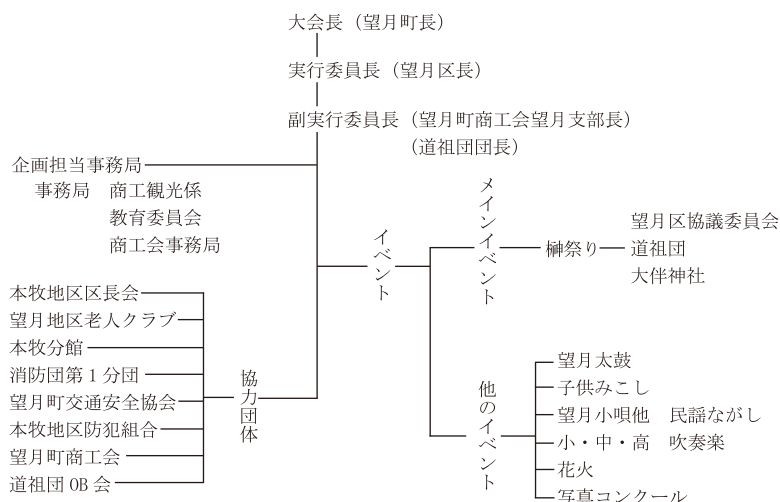
第5図は第1回（1987年）における「榊祭」実行委員会（その後、「榊祭り」実行委員会に改称）の構成を示したものである。これによると、従来から運営の中心的立場にあった道祖団や望月区長（望月区自治会）をそれぞれ副実行委員長、実行委員長としつつ、新たに望月町長を大会長、望月

第2表 「むらおこし事業」における榊祭りを対象とした質問と住民の提案（1986年）

質問1「榊祭りをもっと盛大にするにはどのようにしたらよいか」に対する住民の提案		質問2「榊祭りを中心に前後に何か催しをするとしたらどんなのが良いか」に対する住民の提案	
回答項目	人数	回答項目	人数
1. 町全体の祭りにする（若者総参加、各地区と企業からみこしを出す）	(184)	1. 花火大会を盛大に	(78)
2. 祭りの期間を長く（2日間ぐらい）	(40)	2. 盆踊りを盛大にコンクール	(36)
3. 各種催しを行う（子供みこしを各地区から、芸能人、有名人誘致、仮装おどり、朝市夕市を出す、部落の芸能を披露など）	(28)	3. 歌謡ショー、カラオケ大会、民謡大会	(30)
4. 宣伝をもっと広く行う（北信、南信）	(22)	4. 時代行列、民謡流し	(26)
5. 松明を高いところから投げる、小・中・高校生全員参加、コースの検討	(22)	5. そうめん流し、力持競走、綱引、草競馬、灯籠流し、園児提灯行列	(26)
6. しし舞、みこしを年配の人に出してもらう	(16)	6. 女性みこし、町内職場毎に躍りの連を出す	(16)
7. 町や商工会に協力してほしい（生活がかかっている、長く休めない）	(16)	7. 文化祭、物産展、作品展、即売会	(12)
8. 木を切って見やすくする	(14)	8. ミス榊などコンテスト	(11)
9. 祭典委員会の組織を検討	(14)	9. 太鼓の招待	(9)
10. 広くねり歩く、女性参加を多くする	(12)	10. 事務所対抗仮装大会パレード	(8)
11. 駐車場の確保	(8)		

注）回答は複数回答。

（むらおこし事業実行委員会（1987）より作成）



第5図 第1回町民祭「榊祭り」における「榊祭り」実行委員会の構成(1987年)

注) 当時の祭りの正式名称は「望月町民まつり「榊祭り」」である。

(『望月町公民館報』第267号より作成)

町商工会望月支部長を副実行委員長としており、行政や商工会の運営面の協力がみられた。また、町商工観光係、教育委員会、商工会事務局からなる企画担当事務局を創設したほか、協力団体として本牧地区区長会、望月地区老人クラブ、消防団、望月町交通安全協会などの8団体が参加することになった。ただ、町や商工会の協力は後述する「昼の部」の企画、寄付金集め、宣伝活動などが中心であり、榊祭りの運営はこれまで通り望月区自治会と道祖団が担った。

第6図は第1回望月町民祭「榊祭り」の日程を示したものである。町民祭ではこれまで午後7時ごろから執り行われていた榊祭りを「夜の部」とし、新たに当日に「昼の部」を設け、町民参加のイベントが催された。第1回は午前9時の祈願祭のあと、午後0時から望月町役場前にてオープニングセレモニー、午後1時20分と午後6時半から望月太鼓、午後1時50分から野外コンサートが開催された。また、午後3時から街頭パレードと、旧望月町の本牧地区、布施地区、春日地区、協和地区の各小学校による子供神輿と横笛の巡行なども行われた。

このイベントのうち、望月太鼓は旧望月町が新

たな郷土芸能の設立を目的に1985年から調査・研究を進めてきたものであり、町民祭の開始にあたり披露された(望月町誌編纂委員会編、1999)。

昼の部	・祈願祭	午前9時～ 榊神社
	・オープニングセレモニー	午後0時～ 役場前
	・望月太鼓	午後1時20分～ バスターミナル 午後6時30分～ 同
	・野外コンサート	午後1時50分～ バスターミナル 午後4時40分～ 同
	・街頭パレード	午後3時～ 町内パレード
	・子供神輿(横笛)	午後3時～ 町内
	・民謡おどり	午後5時50分～ バスターミナル
夜の部	・松明	午後7時 松明山点火 望月橋まで
	・民謡流し	午後7時50分 農協前出発
	・横笛	午後7時55分 農協前出発
	・獅子、幣負、大人神輿	午後8時
	・花火	午後7時

第6図 第1回望月町民祭「榊祭り」の日程(1987年)

注) 当時の榊祭りの正式名称は「望月町民まつり榊祭り」である。

(佐久市望月商工会提供資料より作成)

また、同年には町民祭をテーマとした写真コンテストも開催された。これは、写真を通して町民祭や榊祭りを内外にアピールしたい狙いがあった。商工会への聞き取り調査によると、昼の部の創出については、榊祭りは望月町の伝統文化であるもののあくまでも一地区の祭りであり、榊祭りの存続に町や商工会が協力するには、公益性を高めること、すなわち祭りの中に町民参加のイベントを加える必要があったという。

その後、昼の部は年度ごとに様々なイベントが開催された。第2回（1988年）では、望月太鼓や野外コンサートに加えて、天理教しらかば隊ほかによる鼓笛隊パレード、日やけコンクール、カラオケ大会が行われた。続く第3回（1989年）は青空球児・好児や森村まり出演の歌謡ショー、利き酒大会、第4回（1990年）は望月小唄全国大会、駒引き行列、ロックコンサートが開催された。その後も1992年に朝霞市民バンド（現 朝霞市民吹奏楽団）、1993年に滝純子一座の公演が催された。こうした各種のイベントは「榊祭り」実行委員会内の企画担当事務局が企画した。また、芸能人の誘致や歌謡ショー、カラオケ大会、民謡大会などは先の住民のアイデアにもみられ、企画担当事務局はこれらの意見を参照し、企画に活用した。

しかし、1994年以降になると、望月太鼓や子供神輿、横笛は続けられたものの、野外コンサートや歌謡ショー、街頭パレードといったイベントは実施されなくなった。その後は開始時間の変更が若干みられるが、先の子供神輿、横笛、舟引き（望月地域の保育園・幼稚園児が対象）、望月太鼓、2002年から新たに加わった望月高等学校吹奏楽部の演奏という内容により現在に至っている。以上のイベントの中断は、費用面での負担増が原因であった。

2) 子供神輿の参加スケールの拡大

一方、望月太鼓や子供神輿は町民祭が開始された当初から現在まで続けられている。その中で、子供神輿は減少する担い手の育成を目的に、町民祭開始以前の1983年に本牧地区の本牧小学校4～

6年生が初めて参加した。このときの神輿は学年ごとに1基計3基であった。その後、1986年に参加対象が全学年に拡大され、神輿も6基となった。翌年から始まった町民祭では榊祭りが町民全体の祭りと変更されたこともあり、旧望月町内の3地区の小学校（布施小学校、春日小学校、協和小学校）の生徒も学校ごとに2基ずつ参加することになった。これにより小学校の子供神輿は6基から12基に倍増した。また、1995年からは望月中学校、2006年からは望月高等学校の神輿も新たに加わった。

小学校における神輿の参加の呼びかけは、町民祭開始ごろは各学校が主体的に行っていた。本牧小学校では子供神輿の参加が8月の学校行事として組み込まれており、在校生のほとんどが参加した。そのため、神輿は1基につき30名以上と多く、年度によっては神輿を追加することもあった。また、当時は学校長や教員も参加し、生徒と一緒に練り歩いたり、神輿を担いだりしていた。

こうした子供神輿の参加の経験は、その後の榊祭り（大人神輿）の参加や道祖団の加入の契機となることも少なくない。詳細は後述するが、榊神輿の担ぎ手への聞き取り調査によると、担ぎ手の多くが子供神輿の経験を有しており、子供神輿に参加することで、神輿を担ぐことの楽しさや面白さ、また榊祭りの荒々しさを知り、成人後も自然と榊祭りへ参加するようになるという。また、住民からは子どものころに神輿を経験し、神輿のイメージや祭りの雰囲気や養われることで、帰省の際などに参加しやすくなるとの意見も聞かれた。

他方、小学校における参加者の呼びかけは2008年4月の4校の統廃合を機に、学校からPTAの組織である望月小学校榊祭り委員会が担当することになった⁸⁾。榊祭り委員会は委員長1名、事務局1名、4地区から副委員長各4名の計6名から構成される。第3表は2011年における望月小学校榊祭り委員会の活動日程を示したものである。これによると、各委員は5月下旬ごろに神輿の参加申込書を小学校へ配布する。その後、参加児童数に合わせ神輿数を調整し、参加者が少数の場合は

第3表 望月小学校榊祭り委員会の活動日程（2011年）

月日	活動内容
4/8	各地区委員との顔合わせ 副委員長の選出
5/30	各係り選出，参加申込書の配布依頼 (6/6 配布，6/13 締切)
6/17	締切段階での参加児童数の確認 →参加児童数に合わせ神輿数の調整 →申込書締切延長（オクレンジャー使用） →神輿数は委員会に一任
6/27	参加児童名簿，記入漏れの確認 神輿の振り分け，基数決め
7/8	御神木の切り出しの振り分け
7/15	神輿数と振り分けのお知らせを全児童宛 に配布
7/8	法被の配布 手ぬぐい，絵馬，榊祭り情報，当日のスケジュール，各係り最終打ち合わせ
7/25	当日のルート説明 →各学年長，各神輿リーダー出席
8/7	御神木の下見
8/12	工具，ソダ用樽・バケツ，学校看板の用意
8/14	御神木の切り出し
8/15	祭り当日
8/16	片づけ
9/20	反省会
9/29	法被の整理，反省会

（望月小学校榊祭り委員会提供資料より作成）

申込の期日を延長する。この期日は年度によってさらに延長されることもある。7月以降は法被の配布や当日のルート説明，神輿の組み立ての準備などを進める。また，現在では中学校および高等学校でも主としてPTAの役員や生徒会によって参加者の勧誘が行われる。

ただ，子供神輿の参加者数は望月地域の人口減少や，学校からの呼びかけがなくなったこともあり，年々減少傾向にあるという。

Ⅲ－3 町民祭以降の寄付金集めと宣伝活動

1) 商工会による寄付金集め

榊祭りでは祭りの維持・運営の費用は寄付金により賄われている。この寄付金の徴収はこれまで道祖団がすべて担っていた。しかし，過疎化や就業構造の変化に伴い道祖団の役員が減少するとこ

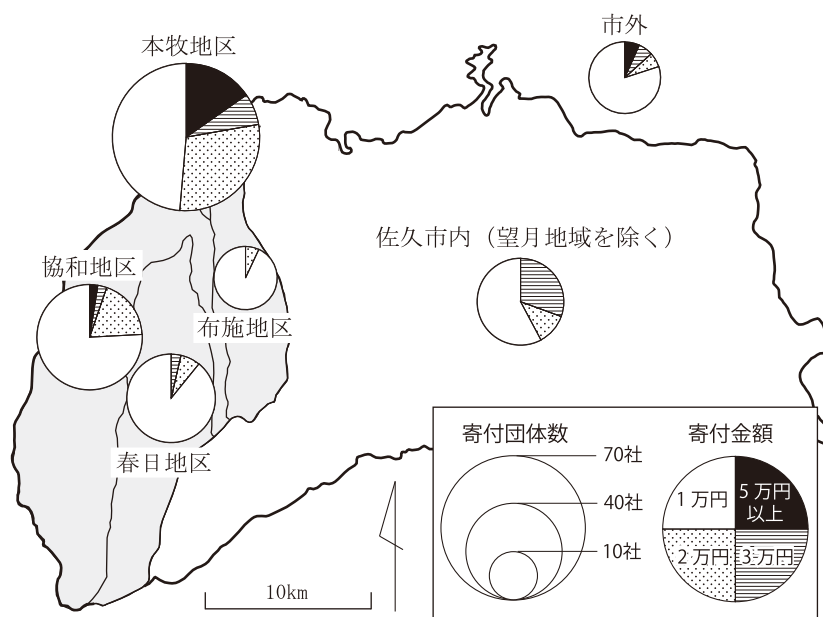
の活動は大きな負担となった。町はこれを受け，1987年の町民祭の開始を機に寄付金集めの一部を望月町商工会に分担することを決めた。具体的には，団体や企業による1万円以上の寄付（特殊寄付という）を商工会が担当し，道祖団は本牧地区を中心に旧望月町内の自治会役員および各戸（個人）を担当することになった。寄付額では総額の約半数から3分の2程度が商工会の担当となった。この分担が可能となったのは，榊祭りが一地区の祭りから町民全体の祭りとなり，公益性が高まったためである。

商工会の寄付金集めは，5月下旬ごろの分担地域の確認や目標額の設定を目的とした「榊祭り」実行委員会の会合を経て（写真5）⁹⁾，毎年7月ごろから漸次実施される。望月支所提供資料によると，2014年の寄付団体（企業を含む）の総数は206であり，寄付額の内訳は5万円以上14，3万円16，2万円39，1万円163である。ただし，寄付を公表しない団体や企業も存在する。寄付者にはソダ（木）と豆絞りが贈呈される。

第7図は2014年における佐久市民祭「榊祭り」の寄付団体の分布を示したものである。これによると，寄付団体数と寄付総額が最も多いのは榊祭りが執り行われる望月地域の本牧地区であり，寄付団体数は71，寄付総額は146万円に上る。寄付額の内訳をみると，5万円以上11，3万円5，2万円21，1万円34である。当地区における5万



写真5 佐久市民祭「榊祭り」実行委員会の会合
（2014年5月 卯田撮影）



第7図 佐久市民祭「榊祭り」における寄付団体の分布（2014年）

- 注1）市外は長野市、千曲市、東御市、小諸市、御代田町、立科町、松本市、諏訪市、飯田市である。
- 注2）寄付団体の分布は所在の確認ができた企業を対象とし、所在不明の7団体は含まない。
- 注3）着色部分は望月地域（旧望月町）を示す。

（佐久市役所望月支所提供資料より作成）

円以上の寄付団体数は全体の84.6%を占める。次に寄付団体数と寄付総額が多いのは協和地区であり、寄付団体数37、寄付総額50万円である。以下、佐久市内の26団体と45万円、春日地区の27団体と31万円、佐久市外の15団体と22万円、布施地区の14団体と15万円となっている。また、地区別の寄付団体数と寄付総額の割合をみると、本牧地区の寄付団体数37%、寄付総額47%であった。

以上から、榊祭りは本牧地区や近接する協和地区を中心としつつ、佐久市内・市外を含む広範囲からの寄付により成り立っていることがわかる。商工会への聞き取り調査によると、2005年の佐久市合併による佐久市民祭以降は特に佐久市からの寄付が増加したという。

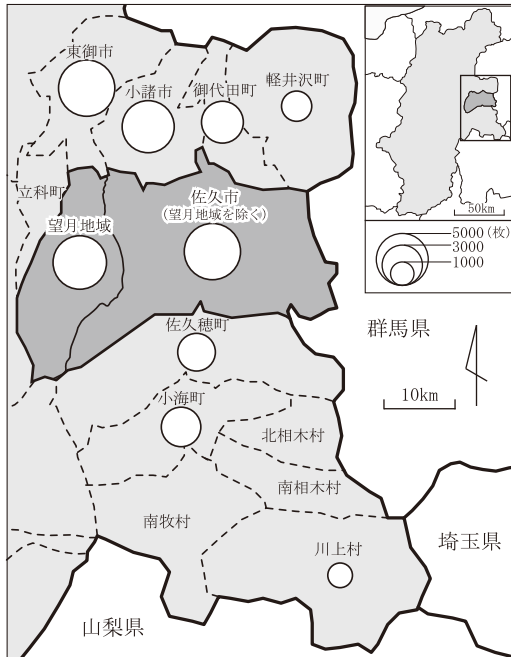
2）宣伝・広報活動

榊祭りは宣伝や広報活動についても重視され、

主に折込チラシの配布、ポスターの作成・掲示などが実施されている。これらの活動は町民祭の開始以前から行われており、当時は道祖団が担っていた。その後、町民祭の開始を機に寄付金集めとともに商工会との協力のもとで実施されるようになった。

第8図は2013年における佐久市民祭「榊祭り」の折込チラシの配布地域を示したものである。これによると、望月地域（5,260枚）や佐久市（5,890枚）を中心に、東御市（5,840枚）、小諸市（5,030枚）、御代田町（3,250枚）の北部地域、また佐久穂町（2,600枚）、小海町（2,870枚）、川上村（1,110枚）の南部地域にも及んでおり、広範囲に配布されていることがわかる。

榊祭りではこの折込チラシの配布に加えて、ポスター（B1、A1サイズ）の作成・掲示も重視されている。このポスターは1980年代半ばごろから



第8図 佐久市民祭「榊祭り」における折込チラシの配布地域（2013年）

注）枚数は配布センターへの配布枚数であり、町村内でのみ配布されるわけではない。

（佐久市役所望月支所所蔵資料より作成）

作成されるようになり、現在は寄付を受けた団体や企業、またJR東日本の新潟、高崎、長野の各支社など計1,100枚ほどが配布されている。

ポスターは毎年趣向を凝らしたデザインが採用される。デザインは町民祭が開始された当時は1社への依頼であったが、現在は毎年数社の企画から選定され、最終的に「榊祭り」実行委員会の了承を経て決定される。第9図（後掲）は1987～2013年におけるポスターデザインの変遷を示したものである。当期間中のポスターは一貫して松明投下と榊神輿を中心とした「夜の部」の榊祭りの祭事、および「信州の奇祭」の表記が採用された。一方で町民祭の開始により新たに始まった「昼の部」の図像はほとんど採用されなかった。「昼の部」のイベントが取り上げられたのは、27回中、1991年の街頭パレード、2010年の望月太鼓、2012年の子供神輿、2013年の子供神輿の計4回のみであり、またその記載面積もきわめて小さい。先述のよう

に、「昼の部」の内容は年度ごとに変化し、様々なイベントが催されていたが、ポスターではこれらのイベントは重視されなかった。

ポスターデザインで一貫して採用された榊祭りの祭事のうち、松明投下は例年記載面積が大きく、ポスターの上部から中心部分に配置されている。また、松明から連想される「炎」（火）も松明の周辺部分（1999年、2000年、2007年）やポスターの枠部分（1992年、1997年）、榊祭りの文字部分（2009年、2010年、2011年、2012年、2013年）などで採用されている。これらのデザインは夜の祭りとしての榊祭りのイメージが重視されたものと考えられる。

榊神輿については、特有の担ぎ方である「あおり」や「土（胴）突き」を行っている荒々しい写真がすべての年度で採用されている。また、1993年ごろからは、これまで1～2基であった神輿の写真が氏子地域（本町、東町、西町、白山）ごとに取り上げられるようになった。以上のデザインの変遷から、榊祭りのポスターは「昼の部」の各種のイベントではなく、松明投下と榊神輿（特に「あおり」と「土（胴）突き」という「奇祭」としての要素が強調されていることが看取される。

他方、佐久市民祭が開始された2005年以降のポスターをみると、これまでの松明投下や榊神輿の強調に加えて、「榊祭り」の文字そのものが拡大し、目立つデザインとなっている。特に2009年以降では、これまでほとんど「小」であった榊祭りの文字のサイズが「中」1、「大」4と著しく拡大した。これは、町民祭から市民祭への変更に伴い、榊祭りに馴染みのない佐久市の住民に対して、よりインパクト性の強いデザインが重視されたものと考えられる。

IV 榊祭りの担い手の活動と意識

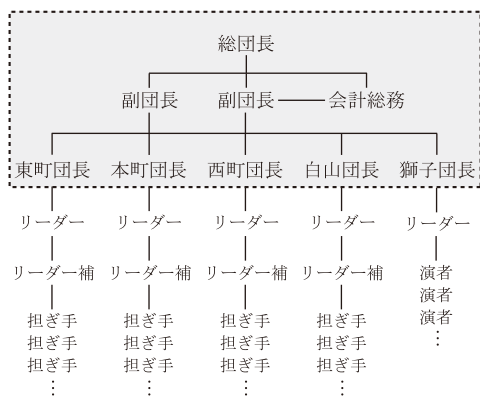
本章は榊祭りの運営や準備を中心的に担う道祖団と、神輿の担ぎ手の活動および意識について検討する。

Ⅳ－１ 道祖団の組織と活動

１）道祖団の組織構成

道祖団の組織は総団長１名、副団長２名、総務会計１名、各地区の団長４名、獅子団長１名の計９名からなる（第10図）。道祖団の選出方法は互選である。役員の方々は道祖団の先輩から勧誘され、加入する。加入条件は28歳までの男子である。神輿を出す４地区には役員としてそれぞれ団長、リーダー、リーダー補が存在するが、道祖団とされるのは団長のみである。当日はリーダーが神輿の井桁の上に乗り、リーダー補は神輿の誘導や操作を担当する。また、団長は神輿を担がず食事（茶、水、酒など）の配給を行う。各役員の方々は年齢は定められており、団長（総団長）は28歳、リーダーは27歳である。ただし、リーダーに関しては、適当な年齢の方がいなかった場合はそれ以下の年齢でも選出される。いずれの役職も任期は１年であるが、人員が不足した場合は次年度も在任することができる。

道祖団の出身地域に規定はない。ただ、榊祭りは本来望月区の祭りであるため、これまで当該地区出身者を基本としてきた。現在の役員は望月地域のほかの地区の出身者も存在する。2012年の道祖団の出身地域をみると、協和地区５名（うち１名は現 佐久市在住）、本牧地区３名（うち１名は現 小諸市在住）、春日地区１名であり、本牧地



第10図 道祖団の組織構成（2013年）

注）着色部分は道祖団を示す。

（聞き取り調査より作成）

区および当該地区に近接する協和地区の加入者が多くなっている。

２）道祖団の活動




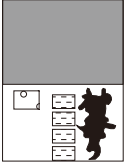



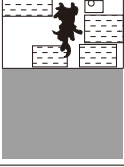

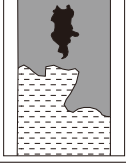

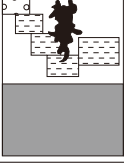



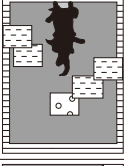

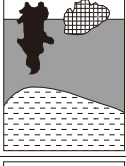

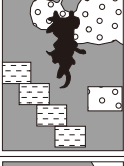

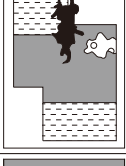

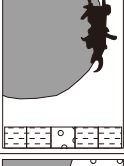

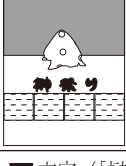

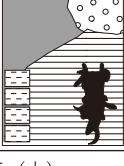
第4表は道祖団の主な活動内容と日程を示したものである。3月の役員引き継ぎのあと、6月中旬ごろから提灯、松明、竹切り（約400本）などの準備が開始される。7月下旬になると、これらに加えて、新モス作り、材木上げ、神輿の運搬などが行われる。以上の作業は望月区自治会や老人会と共同で行われることもあるが、基本的には道祖団が中心となって進められる。また、作業工程が分からない場合は先輩や道祖団のOBなどに尋ねることもある。

かつての道祖団は2～3か月前から世話人の自宅や詰所において共同生活をしながら準備にあ

第4表 榊祭りにおける道祖団の主な活動日程（2013年）

月日	活動内容
5/31	寄付集めの検討会に出席（総団長のみ）
6/4	望月地域の区長挨拶まわり
6/6	望月地域の役員挨拶まわり
6/10	寄付金集めの開始（～28締切）
6～	担ぎ手の依頼の開始
6/22	竹切り
6/29	竹切り（予備日）
7/2	綱巻き
7/3	新モス（新モスリン）作り（～13）
7/7	ポスターの掲示（望月地域）
7/8	ポスターの配布（望月地域、～13）
7/14	松明作り
7/15	ソダの配布
7/21	神輿の移動
7/23	新モス（新モスリン）作り（～31）
7/28	材木上げ
8/4	材木上げ（予備日）
8/12	打ち合わせ
8/13	小屋掛け
8/14	巡行ルートの確認
8/15	榊祭り当日
8/16	片付け

（佐久市役所望月支所所蔵資料より作成）

ポスター	デザイン	記載内容	ポスター	デザイン	記載内容
		【1987年】町民祭開始 ①「信州の奇祭」 ②赤（文字・獅子舞・松明・榊神輿） 黒（松明） 薄茶（背景） ③小			【1994年】 ①「信州の奇祭」 ②橙（松明） 青（獅子舞・文字） 赤（獅子舞・文字） 黒（松明・背景） ③小
		【1988年】 ①「信州の奇祭」 ②橙（松明） 赤（文字・獅子舞・背景） 灰（背景） 白（背景） ③小			【1995年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②橙（松明） 黒（松明） 青（文字・背景） ③小
		【1989年】 ①「信州の奇祭」 ②橙（松明） 黒（松明） 灰（文字） 白（背景） ③小			【1996年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②橙（松明・文字） 黒（松明） 赤（背景） ③小
		【1990年】 ①「信州の奇祭」 ②橙（松明） 緑（榊神輿） 赤（文字） 薄緑（背景） ③小			【1997年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②橙（松明） 黒（松明） 青（文字） ③小
		【1991年】 ①「信州の奇祭」 「望月」 ②橙（松明） 赤（文字） 黒（背景） ③小			【1998年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②橙（松明） 紺（松明） 赤（獅子舞・文字） ③小
		【1992年】 ①「信州の奇祭」 「望月」 ②橙（松明） 赤（文字） 黒（背景） ③小			【1999年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②橙（松明） 赤（文字） 青（背景） ③小
		【1993年】 ①「信州の奇祭」 「望月」 ②橙（松明） ③「文字・獅子舞」 黒（背景） ③小			【2000年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②橙（松明・炎） 黒（松明） 白（文字） ③小
デザイン凡例： 文字（「榊祭り」） 松明 炎（火） 榊神輿 獅子舞 「昼の部」のイベント その他					

第9図 榊祭りにおけるポスター

注1）デザイン・文字・色調は特に大きな面積を占めるもののみ抽出した。

注2）その他はJRのキャンペーン概要や榊祭りの日時・場所などを含む。

注3）記載内容①は図中「デザイン」には含まれない。

ポスター	デザイン	記載内容	ポスター	デザイン	記載内容
		【2001年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②青（松明） 橙（松明・文字） 赤（獅子舞） ③小			【2008年】 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②橙（松明） 黒（文字） 赤（獅子舞・文字） ③中
		【2002年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②赤（文字） 橙（松明・炎） 黒（松明） ③中			【2009年】 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②橙（松明・文字） 黒（背景） 赤（文字） ③大
		【2003年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②黒（松明） 橙（炎・松明） 黄（文字） ③小			【2010年】 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②黒（背景） 臙脂（文字） 橙（松明） ③中
		【2004年】 ①「信州の奇祭」 「信州望月」 ②金（背景） 青（文字） 橙（松明） ③小			【2011年】 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②黒（文字・松明） 橙（松明） 赤（文字・榊神輿） ③大
		【2005年】 市民祭開始 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②黒（松明・背景） 黄（文字） 橙（松明） ③小			【2012年】 ①「信州の奇祭」 ②橙（文字・松明） 紺（背景） 赤（文字） 水（榊神輿） ③大
		【2006年】 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②黒（背景） 橙（松明） 赤（文字・獅子舞） ③小			【2013年】 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②橙（松明・文字・背景） 赤（獅子舞・文字） 紺（松明・文字・背景） ③大
		【2007年】 ①「信州の奇祭」 「信州佐久望月」 ②橙（松明） 黒（背景） 赤（文字・榊神輿） ③小			
<p>記載内容：①「榊祭り」以外の文字 ②色調（使用されているデザイン要素） ③ポスター全体に占める「榊祭り」の文字面積比率 大:20%未満，中:20%以上40%未満，小:40%以上</p>					

デザインの変遷（1987～2013年）

（個人所蔵資料より作成）

っていた。現在、共同生活は行われていないものの、6月ごろからはほぼ毎日、地区のコミュニティセンターに集合し、午後7～10時ごろまで作業を行う。また、週末には一日を費やす作業もある。そのことから、道祖団の活動は職場や家族の理解が重要となる。

以上の活動に加えて、7月ごろからは週5回ほどの日程で寄付金集めが実施される。現在の寄付金集めは商工会との分担であり、道祖団は主に望月地域の自治会役員や各戸（個人）を対象とする。道祖団の経験者への聞き取り調査によると、この負担の軽減によって道祖団の活動が存続し、また加入希望者も増加したという。ただし、現在においても人口減少や祭りへの関心の低下などから寄付金集めは困難である。特に近年は各戸からの寄付が見込めず、代わりに道祖団経験者を対象とした徴収を強化しているという。2013年における道祖団の徴収実績は、寄付者数55、寄付総額は約55万5千円であり、寄付額の内訳は2万円1,1万円53,5千円1である。

祭り当日は午前4時ごろから神輿に結びつける御神木（コナラなど）を付近の山から伐採・搬出する。この作業を当日に実施するのは伐採による葉の萎れを防ぐためである。また、その際、御神木は神輿に乗るリーダーが足をかけて踊るため、途中から二股に分かれているものが選定される。御神木は6月上旬に望月地域内の数か所の山で事

前に調査され、当日は調査時に評価が高かった地区の木が伐採される。2013年は第5表にあるように、本牧地区および協和地区の7か所において調査が行われ、「評価A」の「S工業工場北側山林」から御神木が搬出された。

道祖団は以上のように祭り当日に至るまでの約3か月にわたり様々な準備を行っている。道祖団への聞き取り調査によると、役員同士は学生のころからの友人や知り合いであることが多いため、道祖団の活動は同窓会的な雰囲気の中で行われるという。また、長期にわたる準備期間に役員相互の連帯が深められ、強い仲間意識が芽生える。こうした一連の準備から生じる意識は、次第に榊祭りへの愛着ややりがい、あるいは祭りの継承につながっていくという。

Ⅳ－2 神輿の担ぎ手の活動と意識

1) 担ぎ手の減少と対策

望月地域は1970年代以降、若年層の減少に伴い神輿の担ぎ手不足が問題となっていた。道祖団の経験者への聞き取り調査によると、1970年代前半ごろまでの担ぎ手は本牧地区出身者によって何とか賄われており、外部からの担ぎ手はあまりいなかったという。しかし、その後の人口流出により担ぎ手の不足が深刻化した。この時期には神輿1基を以前の5分の1程度の10名ほどで担いだこともあったという。その後、町民祭の開始により町

第5表 佐久市民祭「榊祭り」における御神木の選定調査結果（2013年）

場所	評価	現状・評価内容
S工業工場北側山林	A	伐採可能の約15本にカラーテープを装着
旧望月町産業採石場西側	B	2005年ごろに協和財産区で植林したコナラ約300㎡を確認 御神木として使用可能になるまであと10年ほどかかる
協和の森	C	土地所有者、老人クラブの了解済み、約4本程度
Sカントリークラブ正面入口付近	C	協和財産区の同意が必要、5本確認
比田井峰道線沿い	C	土地所有者の同意が必要、搬出条件が悪い
御牧原峰道沿い	—	形状が悪く、本数もない
山犬久保（協和財産区内）	—	同上
今平（協和財産区内）	—	同上

注）場所の特定を避けるため、場所名を一部変更している。

（佐久市役所望月支所所蔵資料より作成）

民全体の祭りとなったことから、本牧地区以外の担ぎ手を受け入れるようになった。現在では担ぎ手全体の約3割が本牧地区以外や望月地域以外からの担ぎ手となっている。

また、道祖団では外部への呼びかけに加えて、一部の地区の担ぎ手の年齢制限を引き上げることで担ぎ手の確保を行った。先述のように、神輿の担ぎ手は28歳までの男子に限られていた。その中で、氏子地域の一つである本町では担ぎ手不足が深刻化し、2004年ごろから道祖団や担ぎ手を経験した29～31歳のOBの参加を認めた。その後、2010年代以降になると、本町の担ぎ手は出身の氏子地域を問わず、OBで構成されるようになった。そのため、本町の神輿は「OB神輿」と呼ばれている。

以上のように、過疎化による人口減少に伴って地区内の神輿の担ぎ手は減少したものの、本牧地区以外への担ぎ手の依頼とOBの参加によって、例年各地区20名前後の担ぎ手が確保されている。

2) 担ぎ手の活動

神輿の担ぎ手の依頼は毎年6月ごろから、主に各地区の団長およびリーダーによって行われる。依頼は自身の学生時代の友人や職場の同僚、また直接面識がない友人の友人まで幅広く呼びかけられる。そのため、担ぎ手の分布は望月地域や佐久市に加えて、立科町、小諸市、東御市、上田市(丸子)などの広範囲にわたっている。また、望月地域では広報や有線放送(8月12日～14日)によって松明の参加者と神輿の担ぎ手の募集が行われる。

7月下旬になると、担ぎ手同士の親睦を目的とした食事会が催される。この会は地区ごとに行われる。その後は8月15日の祭り当日まで担ぎ手同士が集まる機会はない。祭り当日、担ぎ手の一部は午前4時ごろから神輿に取り付ける御神木の搬出を手伝う。その後、担ぎ手は地区ごとに分かれ、各地区の神輿の組み立てを行う。組み立ては主に御神木や担ぎ棒の取り付け、新モスの巻き付けなどの作業である(写真6)。かつては世話人から御神木の形状や縄の結び方の誤りを指摘され、は

じめから組み立て直すこともあった。現在は道祖団およびOBの指導のもとで進められる。午後1時ごろになると、担ぎ手は地区ごとに分かれ、飲食・飲酒を兼ねた集会を行う。

午後6時ごろ、松明投下に参加する担ぎ手は松明山のかがり火から点火した松明を持って望月橋まで一列で駆け下る。そして、松明を望月橋から鹿曲川へ一斉に投げ入れる。この松明投下は望月地域の小、中、高等学校の有志の児童・生徒、募集により集まった松明のみの一般参加者、地区ごとの担ぎ手の順に行われる。その後、担ぎ手は神輿の出発点であるJA佐久浅間望月支所へ移動し、午後7時ごろから大伴神社へ向けて渡御する。神輿は午後11時ごろに大伴神社へ奉納され、当日の担ぎ手の活動は終了する。

神輿の巡行の際には神神輿特有の担ぎ方である「あおり」や「土(胴)突き」が何度も繰り返される。この担ぎ方は例年けが人を出すほど荒々しいものであり、担ぎ手同士の息の合った操作が重要となる。ただ、担ぎ手の中にはお互い面識のない者もあり、担ぎ手同士の関係は希薄であることが少なくない。しかし、事前の食事会や当日の準備および集会を通して、担ぎ手同士の団結力や担ぎ手と



写真6 担ぎ手による神輿の組み立て風景

(2014年8月 卯田撮影)

しての祭りの意識が醸成される。また、後述するように、一度祭りに参加するとその魅力からそのまま年齢上限の28歳、あるいはOBとして継続的に参加する者も存在する。そのため、巡行は担ぎ方を理解している担ぎ手を中心となって進められる。

3) 担ぎ手の参加意識

本項は担ぎ手の参加意識について検討する。第6表は2014年における神輿の担ぎ手12名の聞き取り調査をまとめたものである。この調査は同年8月15日午前中の神輿の組み立て作業時に実施した。質問項目は担ぎ手の居住地、神輿の地区、参加時期（回数）、参加動機、子供神輿の経験、榊祭りの魅力、参加による担ぎ手同士の交流の有無などである。聞き取りは1名につき10～15分程度行った。

神輿の担ぎ手は本牧地区および望月地域出身者（居住者）と、望月地域以外の者に大別することができる。聞き取り調査では望月地域以外の担ぎ手は4名（番号2、7、9、10）であった。本年度は例年と同様の3割程度が望月地域以外からの担ぎ手である。

はじめに本牧地区および望月地域出身の担ぎ手について述べる。担ぎ手の多くは榊神輿への参加が可能となる高校生（16～18歳）ごろから参加している（番号1、3、4、5、6）。これらの担ぎ手はその後も継続的に参加し、年齢上限の28歳あるいは31歳まで担ぐことも少なくないという。また、番号1、3、6、8は榊神輿の以前に子供神輿の参加経験を有している。このうち、番号1は小学校および中学校時の子供神輿への参加以降、毎年榊神輿に参加している。子どものころから地元の祭りである榊祭りに参加し、神輿を担ぐことが当た

第6表 神輿の担ぎ手の参加形態と意識（2014年8月）

番号	出身 (居住地)	神輿 地区	参加時期 (回数)	動機	子供神輿 の経験	榊祭りの魅力	交流	その他
1		本町	高校生	地元の祭りだから	あり	見ればわかる	あり	道祖団のOB
2	佐久市	東町	初めて	職場の先輩の誘い	なし	荒々しい	あり	地元の祭りには参加しない
3	望月地域	白山	高校生	小さなころからの憧れ	あり	激しい、伝統	あり	リーダー（2014年）
4	望月地域	西町	18歳	友人の依頼	なし	あおり	あり	リーダー（2014年）
5	望月地域	東町	高校生	地元の祭りだから	なし	荒々しい	あり	
6	望月地域	白山	高校生	友人の依頼	あり	激しさ		
7	小諸市	東町	初めて	自分から参加	なし	迫力 ほかの祭りと違う		去年まで見学 地元の祭りには参加しない
8	望月地域	本町	8年前	友人の依頼	あり	迫力、土突き		
9	佐久市	本町	8回目	友人の依頼	なし		あり	地元の祭りに参加
10	佐久市	本町	5回目	知人の依頼	なし	ほかにはない	あり	地元の祭りに参加
11	望月地域	東町	以前から	友人の依頼		荒々しい	あり	
12	望月地域	白山		知人の依頼		見ればわかる 変わった祭り	なし	

注1）空欄は不明を示す。

注2）「出身（居住地）」の佐久市は望月地域以外を示す。

（聞き取り調査より作成）

り前だと思っていたという。以上の点からは、小・中学校時の子供神輿の経験がその後の榊祭りの参加に影響を及ぼしていることがうかがえる。

次に参加動機については、担ぎ手の多くが地元の友人の紹介や依頼という「地縁」を通して参加しており（番号4, 6, 8, 11, 12）、身近な友人の中に神輿の担ぎ手が存在していることがわかる。他方で、番号1, 3, 5は地元の祭りであること、また小さなころからの憧れなどの理由から自ら率先して参加している。

榊祭りの魅力については、担ぎ手のほとんどが「荒々しい」、「激しい」、「迫力」を挙げており、神輿の「あおり」や「土（胴）突き」が大きな魅力となっている。その中で、番号6は17歳から榊神輿を担ぎ始め、それ以来毎年参加している。榊神輿の激しさや荒々しさを祭りの魅力、また他地域の祭りとは異なる榊祭りの特徴であるとし、担ぎ手にとってこの激しさが参加する上で不可欠な要素であると捉えている。こういった点は後述する望月地域以外の担ぎ手の魅力としても語られていることから、担ぎ手にとって重要な意味を有していることがうかがえる。

また、番号1, 3, 4, 5, 6, 11からは榊祭りの参加を機に担ぎ手同士の新たな交流が生まれるとの意見が聞かれた。番号1, 5によると、先述した担ぎ手の一連の活動を通して他地域出身の担ぎ手と知り合いになり、互いの地域の祭りに参加することがあるという。佐久市岩村田や野沢、小諸市などは榊祭りと同様に担ぎ手が不足しており、担ぎ手同士がこれらの祭りに参加し、協力し合う。

次に、望月地域以外の担ぎ手について述べる。担ぎ手への聞き取り調査では望月地域以外の担ぎ手は4名であり、このうち番号2, 7は今年（2014年）が初めての参加であった。番号2は職場の先輩からの誘いにより参加した。神輿の地区は紹介した先輩がかつて所属した東町である。番号2は以前から榊祭りのことは知っており、榊神輿特有の「あおり」や「土（胴）突き」による荒々しさに魅力を感じていたという。

小諸市出身の番号7は以前から榊祭りに観客と

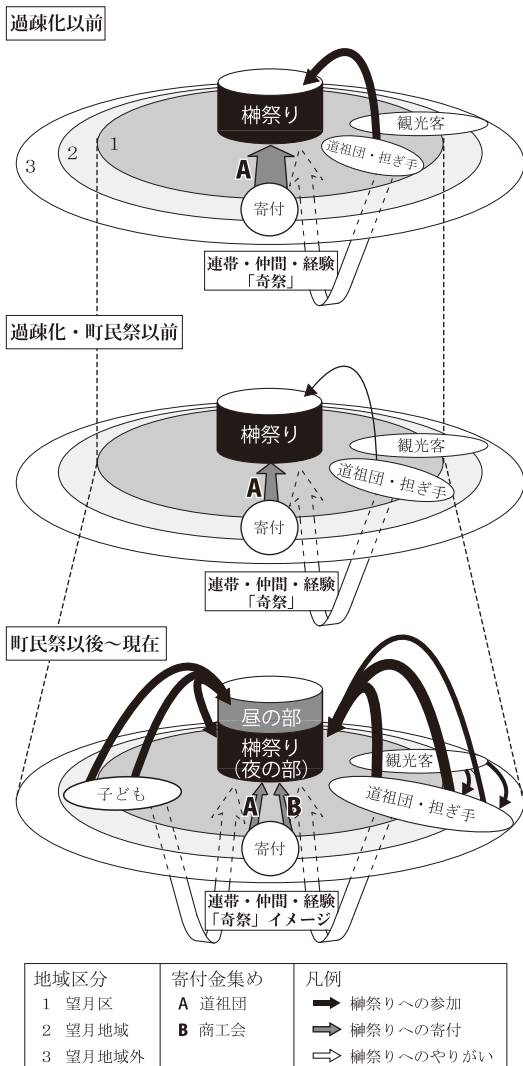
して訪れており、ほかの祭りにはない榊祭りの魅力に惹かれ、参加したいと考えていた。その後、思い掛けず現在の職場に東町のOBの友人がいたことから、紹介を受けて参加することができたという。また、両者は地元の祭りには参加しないとしており、榊祭りに地元の祭りにはない魅力を感じていることがわかる。以上の2名の聞き取りからは、望月地域以外からの担ぎ手は榊祭りの荒々しさやほかの祭りにはない特異性に惹かれ、参加していることがうかがえた。

V 榊祭りの存続形態

本章では、Ⅲ、Ⅳで検討した自治体の取り組みと祭りの担い手の活動を踏まえ、榊祭りの存続形態について考察を行う。ここでは、特に自治体の取り組みである町民祭と榊祭りの存続との関係に注目する（第11図）。

1970年代以降の過疎化の進行によって従来の榊祭りの存続が困難となる中、旧望月町は祭りの存続と地域活性化を目的に、榊祭りをこれまでの一地区の祭りから町民全体の祭り＝町民祭へと変更した。この変更は榊祭りの存続において、以下の点から重要な役割を果たした。

第一に、寄付金集めにおける分担制の導入である。榊祭りでは祭りの維持・運営の費用は寄付金によって賄われている。この寄付金集めはこれまで道祖団がすべて担っていた。しかし、過疎化や就業構造の変化に伴って道祖団の役員が減少すると、活動は大きな負担となった。道祖団の経験者への聞き取り調査によると、道祖団の活動が開始される7月以降、その活動の大半が寄付金集めであり、連日のように各地域を回っていたという。また、1980年代半ばに道祖団の役員が極端に減少した際、当時の役員はその対策を望月区自治会や旧望月町へ申し入れたが、その理由も寄付金集めの負担増からであった。町では以上の状況を受けて、町民祭の開始にあたり寄付金集めを商工会と分担させることを決めた。これにより道祖団の負担が大幅に軽減され、活動の継続が可能となった。



第11図 榊祭りにおける過疎化の進行と存続形態 (1960～2014年)

注) 本図では過疎化以前を便宜的に1960年とした。

以上の点から、寄付金集めの分担制の導入が祭りの存続に重要な役割を果たした。

次に、町民祭の開始による担い手の参加スケールの拡大を挙げることができる。榊祭りはこれまで望月区の住民によって担われてきた。町民祭の開始以降は榊祭りが町民全体の祭りへとその規模が広がったことで、担い手の参加スケールも拡大した。これにより望月区以外から道祖団や神輿(大

人神輿)の担ぎ手を含めた担い手の受け入れを行うようになり、担い手の確保が容易となった。また、担い手の育成を目的に始められた子供神輿については、旧望月町の4地区すべての小学校が参加することになり、神輿もこれまでの6基から12基に倍増した。この子供神輿の参加の経験は、その後の榊祭り(大人神輿)の参加や道祖団の加入の契機となることが少なくない。現在の神輿の担ぎ手の多くは子供神輿の経験を有しており、参加によって神輿を担ぐことの楽しさや面白さを知り、その後、榊祭りに参加するようになる。以上の点から、町民祭の開始による参加スケールの拡大や担い手の育成機会の増加は、担い手の確保および継承において重要な役割を果たしたと捉えることができる。

他方、イベントと融合した祭礼は経済的効果の重視から祭礼内容の大幅な変更(「見せる祭り」への変容)や、「商品化」が進行すると指摘されてきた(芦田, 2001など)。榊祭りにおいても祭り当日に「昼の部」が追加され、また町民祭の開始当時は野外コンサートや街頭パレード、カラオケ大会などの様々なイベントが催された。しかし、こうした各種のイベント開催にもかかわらず、榊祭りの祭事自体に大きな変更はなかった。これは、「昼の部」のイベントの企画は「榊祭り」実行委員会内の企画担当事務局が主導し、榊祭りの祭事は従来通り望月区自治会と道祖団が担うことが当初から明確化されていたことが関係している。この両者の棲み分けにより、榊祭りの担い手は町民祭の開始以降もこれまでと同様に活動を進めることができた。また、この点は榊祭りに対する担い手の意識とも関係する。先述したように、道祖団の長期にわたる準備や、神輿の「あおり」「土(胴)突き」といった榊神輿特有の荒々しい担ぎ方は、道祖団の役員や神輿の担ぎ手に榊祭りへの愛着ややりがいをもたらしている。そのため、これまでと同様の活動内容や担ぎ方は、担い手としての自覚の醸成において重要な意味をもった。

また、町民祭以降のポスターの作成・掲示は、こうした担い手の活動の自覚を強化する機能を有

していると指摘できる。榊祭りのポスターは毎年趣向を凝らしたデザインが採用されている。デザインの変遷に注目すると、町民祭により創出された「昼の部」に関わる図像はほとんど取り上げられず、松明投下と榊神輿を中心とした「夜の部」の榊祭りの祭事、および「信州の奇祭」の表記が一貫して採用された。このうち、松明投下は例年記載面積が大きく、ポスターの上部から中心部分の目立つ場所に配置された。また、神輿は榊神輿特有の「あおり」や「土（胴）突き」を行っている写真がすべての年度で採用された。以上のデザインの変遷からは、榊祭りのポスターは「昼の部」の各種イベントではなく、松明投下と榊神輿という「奇祭」としての要素が強調されていたことが看取された。こういったデザインは榊祭りの「奇祭」としてのイメージを外部に伝達する役割をもっている。一方で、このイメージは外部だけでなく、榊祭りの担い手に対しても作用している。すなわち、町民祭以降の一貫した「奇祭」を強調したデザインは、担い手に榊祭りの「奇祭」としてのあり方の継承をもたらしっていると捉えることができる。

VI おわりに

本研究は佐久市望月地域の榊祭りを事例に、過疎地域における祭礼の存続形態について検討した。

戦後、過疎化が進行した農山村地域では担い手となる若年者の減少や高齢化の進行、費用面の負担などから、地域の文化的基盤である祭礼の維持・継承が困難となった。この状況に対して、過疎地域の自治体は祭礼の「上演」やイベントとの融合を進めることで、地域の活性化や紐帯の強化、また祭礼に要する費用面の確保による祭礼の存続を図った。本研究で対象とした榊祭りはこうした取り組みの一つとして位置づけることができる。

榊祭りはこれまで望月区の住民により担われてきた。しかしながら、1970年代以降の急速な過疎化によって、神輿の担ぎ手や運営組織である道祖

団の維持が困難となった。旧望月町ではこれを受け、従来の一地区の祭りから、イベントを加えた町民全体の「町民祭」として再編することで榊祭りの存続と地域活性化を図った。この町民祭の開始は、寄付金集めの分担制の導入、祭りの参加スケールの拡大による担い手の確保と育成機会の増加、という点において榊祭りの存続に重要な役割を果たした。

また、榊祭りではイベントと祭事が当初から明確に区分されていたことで、町民祭の開始以降も祭事自体に大きな変更はみられなかった。この両者の棲み分けは単に祭事の継続という点だけでなく、祭りの担い手をめぐる一連の活動によってもたらされる榊祭りへの愛着ややりがい、担い手としての自覚の醸成を維持する上でも重要な意味をもった。加えて、町民祭以降の一貫した「奇祭」を強調したポスターデザインは担い手の自覚を強化する機能を有した。こうした自覚の醸成は祭礼の存続における費用面の負担軽減や人員確保などの「直接的な課題」に対して、「間接的な課題」と位置づけられる。そのことから、榊祭りは自治体の取り組みである町民祭を機に、直接的および間接的な課題を克服することで存続してきたと指摘することができる。

祭礼や行事の存続における自治体の役割に注目した先行研究は、経済的支援や観光振興の役割については検討されているものの、担い手の確保と自治体の取り組みとの関係については十分に論じられてこなかった。本研究で対象とした榊祭りでは、経済的な支援に加えて、間接的な課題を含む担い手の確保において重要な役割を果たしたことを明らかにした。こうした間接的な課題の克服は、そのほかの過疎地域における祭礼の存続を検討する上でも重要な視点になり得ると考えられる。

他方、道祖団による寄付金集め負担は軽減されたものの、近年は人口減少や祭りへの関心の低下などによって活動が困難となっているとされる。また、2014年の道祖団役員への聞き取り調査によると、役員は年々減少傾向にあるという。こうした近年の動向に対し、今後は町民祭以降培われた

「存続の仕組み」を踏まえつつ、自治体、道祖団、 で以上に強化し、さらなる取り組みを進めていく
神輿の担ぎ手を中心とした各主体の連携をこれま ことが求められるだろう。

現地調査に際して、柴平忠春氏（佐久市民祭「榊祭り」実行委員会委員長）、金井重恭氏（大伴神社宮司）、
依田裕喜氏、清水智宏氏、北原勇治氏をはじめとする望月地域の住民の方々、道祖団の岩城直樹氏（2013
年総団長）、飯島圭亮氏（2014年総団長）、神輿の担ぎ手の皆様には貴重なお話をお伺いすることができま
した。また、池田幸明氏には突然のお願いにもかかわらず榊祭りのポスターを快く見せてくださいました。
さらに、武田悟氏（佐久市役所望月支所）や佐久市望月商工会の皆様には榊祭りに関する資料の閲覧に際
し多大なるご協力を賜りました。聞き取り調査の際には、筑波大学大学院生命環境科学研究科の渡辺亮佑
氏にご協力いただきました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は2014年9月に開催された日本地理学会秋季学術大会（富山大学）において発表した。

【注】

- 1) 『館報もちづき』68号（1966年）による。
- 2) コナラのほかにクスギやタモの木の場合もある。
- 3) 祈願祭の出席者は後述する「榊祭り」実行委員会の役員が中心である。玉串奉奠は大会長である佐久
市長、榊祭り実行委員会委員長、望月交番所長、佐久市望月商工会長、佐久消防団長、本牧地区区長
会長、寄付者代表、道祖団総団長が行う。
- 4) 以下では、佐久市合併以前の望月地域を言及する際には旧望月町と表記する。
- 5) 望月町民祭「榊祭り」は、年度により名称が望月町民まつり榊祭、望月町民祭榊まつりなどと変化するが、
本文中では望月町民祭「榊祭り」と統一する。
- 6) アンケートとアイデア募集の調査対象は、望月中学校1・2年父兄、青年団員、商工会青年部員、役
場職員、農協職員、農業委員会委員、財産区議員、町議会議員、区長、むらおこし事業実行委員会委
員の総数750名（回収率70%）である。調査内容は特産物等に関するもの、観光資源に関するもの、祭・
催し・行事に関するもの、人口増加や若者定着問題等の31項目であり、すべて記述式で行われた。
- 7) アンケートでは、「現在地域に伝わる物語やお祭り行事をあげて下さい」の質問に対し、榊祭り（174、
人数、以下同じ）、シシ舞、道祖神（82）、望月物語り（61）、さんばそう（42）、どんどやき（25）、
念仏おどり（12）、十九夜様（8）と、榊祭りをあげる住民が最も多かった（むらおこし事業実行委
員会、1987：25）。
- 8) 4校は統合されて佐久市立望月小学校となった。
- 9) この会合の参加者は「榊祭り」実行委員長、佐久市望月商工会長、同商工会望月支部長、同商工会布
施支部長、同商工会春日支部長、同商工会協和支部長、同商工会事務局長、道祖団総団長、佐久市役
所望月支所担当者4名である。

【文 献】

- 芦田徹郎（2001）：『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社。
- 安藤直子（2002）：地方都市における観光化に伴う「祭礼群」の再編成－盛岡市の六つの祭礼の意味付け
をめぐる葛藤とその解消－。日本民俗学，**231**，1-31。
- 池上 徹（1975）：『日本の過疎問題』東洋経済新報社。
- 石川菜央（2004）：宇和島地方における闘牛の存続要因－伝統行事の担い手に注目して－。地理学評論，
77，957-976。
- 石川菜央（2005）：隠岐における闘牛の担い手と社会関係。人文地理，**57**，374-395。
- 大沢洋三（1975）：『望月ものがたり－信州/佐久－』信濃路。
- 大野 晃（2005）：『山村環境社会学序説－現代山村の限界集落化と流域共同管理－』農山漁村文化協会。
- 岡橋秀典（1997）：『周辺地域の存立構造－現代山村の形成と展開－』大明堂。

- 岡橋秀典（2000）：中山間地域研究と農村地理学－地域学的アプローチからの一考察－．広島大学文学部紀要, **60**, 113-138.
- 小田切徳美（2009）：『農山村再生－「限界集落」問題を越えて－』岩波書店.
- 北沢正和（1988）：望月の榊祭り．小林経広ほか編『目で見る信州の祭り大百科』郷土出版社, 322-323.
- 金 科哲（2000）：過疎地域における従属的地域構造の形成過程と内生的住民組織の変容－長野県下伊那郡浪合村を事例に－．人文地理, **52**, 28-50.
- 小島美子（1992）：民俗芸能が観光の材料にされる!! 芸能, **34**(3), 62.
- 小松和彦（1997）：神なき時代の祝祭空間．小松和彦編『現代の世相5 祭りとイベント』小学館, 5-38.
- 佐久市立望月歴史民俗資料館編（2008）：『佐久市立望月歴史民俗資料館－展示・収蔵資料図録－』佐久市教育委員会.
- 篠原重則（1991）：『過疎地域の変貌と山村の動向』大明堂.
- 鈴木榮太郎（1940）：『日本農村社会学原理』日本評論社.
- 田中宣一（2004）：現代の祭り状況と祭り類型化の試み－大分県佐賀関町「関の権現夏祭り」を例として－．民俗学研究所紀要, **28**, 69-105.
- 田林 明（2000）：持続的農村形成におけるコミュニティ活動の役割－富山県黒部川扇状地農村の事例－．人文地理学研究, **24**, 29-54.
- 中小企業庁編（1989）：むらおこし事業は、いま．月刊中小企業, **41**(7), 8-17.
- 中條曉仁（2003）：過疎山村における高齢者の生活維持メカニズム－島根県石見町を事例として－．地理学評論, **76**, 979-1000.
- 長野県総務部地方課編（1965）：『長野県市町村合併誌 上巻』長野県.
- 西野寿章（1998）：『山村地域開発論』大明堂.
- 農山漁村文化協会（1998）：『祭で輝く地域をつくる』農山漁村文化協会.
- 原田敏明（1975）：『村の祭祀』中央公論社.
- 夫 恵眞・金 科哲（2010）：過疎山村における住民組織の自治機能の維持－広島県安芸高田市川根地区を事例に－．人文地理, **62**, 36-50.
- 星野 紘（2012）：『過疎地の伝統芸能の再生を願って』国書刊行会.
- むらおこし事業実行委員会（1987）：『地域小規模事業活性化推進事業「むらおこし事業」講演要旨とアイデアのまとめ』望月町・望月町商工会.
- 茂木 栄（1993）：シンポジウム『民俗芸能とおまつり法』．民俗芸能研究, **17**, 95-96.
- 望月町誌編纂委員会編（1996）：『望月町誌 第二巻 民俗編』望月町.
- 望月町誌編纂委員会編（1999）：『望月町誌 第五巻 近現代編』望月町.
- 谷部真吾（2000）：見せる祭りを目指す実践の誕生－遠州『森の祭り』における花火の打ち上げをめぐる－．日本生活学会編『生活学24 祝祭の一〇〇年』ドメス出版, 61-78.
- 米山俊直（1969）：『過疎社会』日本放送出版協会.

